

働く母親と階層間格差

——仕事意欲と家事分担に関する質的研究——

明治大学 藤田結子

1. 目的

本研究の目的は、どのように働く母親が仕事と家庭の両立を意味づけ交渉しているのか、それに階層がどう関わっているのかを考察することである。今日、「イクメン」意識は高まっているが、平日の「セカンド・シフト」は女性が行っている。日本における仕事と家事分担に関する質的研究は意義ある知見をもたらしてきたが、主に高学歴の先進的カップルが対象とされてきた（船橋 2006, 小笠原 2009 他）。働く母親がいる世帯の大半を占める階層中位～下位の内実には十分に明らかにされておらず知見は乏しい。そこで本研究は、質的調査においてリクルートが難しい階層下位の家庭にもアプローチし、働く母親の意識や行為、葛藤状況を階層との関連から分析する。

2. 方法

首都圏において階層上位の2地域(地区X),階層中位の1地域(地区Y),階層下位の2地域(地区Z)を調査地とした。各地域で保育園を拠点にスノーボール方式で調査協力者を募り、働く母親40名以上に複数回の半構造化インタビューと参与観察を実施した。協力者は主に子育て中の30～40代の女性で、雇用形態では8割がフルタイム、対象にはひとり親世帯も含まれる。

3. 結果

調査協力者の母親たちには、「男性が外で仕事、女性が家事育児」という性別分業を否定するにもかかわらず、仕事を調整し子供の世話に時間を費やそうとする行動がみられた。船橋(2006)の類型を用いると、高学歴フルタイム母親では「平等主義」「女性の二重役割」型、中～低学歴フルタイム・パートタイム母親では「女性の二重役割型」になる傾向が見られた。他方、「役割逆転」「男性の二重役割」型は少なかった。

とくに重要な点として、仕事への意欲と両立をめぐる葛藤、夫との家事育児分担とそれをめぐる葛藤については、バリエーションが見出された。階層上位の母親には仕事をアイデンティティの一部と見なし葛藤・交渉する様子が見られたが、階層下位の働く母親たちの場合、仕事と生活の「お金」に関する語りがよく聞かれ、「(仕事が)楽しいって人いなさそうな気がする。いるのかな」「いないんじゃない」といった当事者の会話が示すように仕事意欲をもちにくい様子が見られた。また、階層中位では重い二重負担でも葛藤が弱いケースがあり、これには「女性活躍」言説や過去の仕事上の経験が影響していると考えられる。さらに、妻側から見た夫の家事育児分担が低い理由として、長時間労働、ケア負担を避けようとする意識は共通していたが、階層上位の家庭では「仕事規範」(小笠原 2009)、下位の家庭では夫の娯楽・趣味優先という特徴が見られた。

4. 結論

階層上位の女性にはキャリアおよび「平等主義」型の関係の形成も見られたが、階層中～下位の女性は低賃金労働とケア労働を引き受ける「二重役割」型となっていた。新自由主義の流れの中、階層・地域によって、母親たちが大きく異なる「現実」を生きている状況が明らかになった。

文献

船橋恵子, 2006, 『育児のジェンダー・ポリティクス』 勁草書房.

小笠原祐子, 2009, 「性別役割分業意識の多元性と父親による仕事と育児の調整」『家計経済研究』 81:3.